

工房オンセは別府市より車で30分ほど入った山里にあります。回りは緑に囲まれ、自然の恵みがいっぱいの中で手作りの伝統工芸品である、ハンドバッグや花籠、盛り皿、ランプ等の作品作りに精を出している職人集団です。大分県は日本一の真竹の生産地です。伸びが良く柔らかい真竹は竹工芸品に適しており、特に細かい細工と強度を要求されるハンドバッグには欠かせないものです。工房オンセの作品には私の名前の雅人から一文字取った、「雅」の銘を彫っています。これは真竹で編んだ国産手作りの作品である証です。現在、全国の有名デパートやギャラリー等で展示会を開催し、たくさんの方々にご愛顧いただいています。また今年も皆様のお近くで展示会などを開催した時はお気軽にお立ち寄り下さい。

研修旅行

9月27日研修旅行で宮崎県の日之影町に行く。ここには私たち竹職人の大先輩である廣島一夫さんが居られる。15歳から弟子入りして、現在90歳、75年にも及ぶ職人人生。かるいとかしょうけ、飯籠など生活道具を作り続けてこられた方だ。初めてお会いした時は「ずいぶん立派な、まるで岩飛びペンギンのような眉毛の人だな」と。私どもの工房とは作風も全然違うのだが、道具の一つ一つ、その道具の減り具合、竹を持つ時の手付きや物腰、感心する事や考えさせられる事がたくさんあった。工房のメンバーも熱心に一語一句聞き漏らすまいと真剣に聞き入っていた。短い時間だったが有意義な時間を過ごさせて頂いた。これからもまだまだ現役で元気な頑張っていたいただきたいと思います。本当にありがとうございました。



テレビ取材 「人生の切符」に出演して

今年の春、突然東京のテレビ制作会社から取材の申し込みがあった。私たちは日頃何げなくテレビ番組を見ているが30分番組を作るのに、その20倍くらいの取材フィルムをまわす、ロケも約一週間張り付きで、私の住んでいる地域のあちらこちら、夜中に竹藪を撮ったり、都市のデパートでの販売風景、深夜に及ぶ作品撮り（それらのほとんどが編集で消えていくのだが）大変な労力と時間をかけて撮影が行われる。私たちにとっては全国のお客様に今持って頂いている作品がどんな所で、どんな風に作られているのか知っていただける事は願ってもない機会でした。

2005年 デパート催事予定 お近くの時は是非会場に遊びに来て下さい

1月12~18	浜松遠鉄百貨店 (九州展)	5月下旬	梅田阪急 (職人展)
1月26~2月1	松坂屋本店 (九州展)	6月29~7月5	静岡松坂屋 (職人展)
2月22~28	新宿伊勢丹本店 (大九州展)	7月5~11	三越本店 (職人展)
3月16~22	神戸大丸 (日本の職人展)	7月13~19	松坂屋本店 (職人展)
3月23~30	宇都宮東武 (九州沖縄物産展)	8月17~22	新宿伊勢丹 (九州展)
4月中旬	京都伊勢丹 (職人展)	8月24~29	松戸伊勢丹 (九州展)
4月下旬	千里阪急 (日本の職人展)	8月31~9月5	浦和伊勢丹 (九州展)
5月11~18	相模原伊勢丹 (職人展)	9月15~21	東急東横店 (職人展)
5月20~22	三越本店 (特選和食器売場)	10月上旬	上野松坂屋 (職人展)

家庭画報の5月号に私のバッグを載せて貰いました。その記事を見て鹿児島のお客様からお電話を頂いた、「作品を見て感動しました、それと、作者の名前を見てびっくりしました」その方は私と一字違いの「高江政子」さんとおっしゃる方でした。「高江」という苗字は珍しい名前ではないのですが、名の方まで一字違いでびっくりされた事、又、その記事の中に「工房オンセ」の名前はスペイン語の11から取ったもので私のラッキーナンバーという記事から、「どうしてラッキーナンバーが11なのか？」と聞かれました。実は私は11月11日生まれで、そこから取った故をお話すると、なんと、相手の方も11月11日生まれであった事、同姓同名の話はたまたま聞きますが、誕生日まで同じとは、電話越しに鳥肌が立ってしまいました。この方とのご縁はこれだけで終わらず、その電話から一ヶ月ほどして、私が京都のデパートで実演をしていると、突然、「先日電話した高江です」と挨拶されてびっくりです。その方は京都のお寺さんにお参りに来ていて、偶然私がデパートの職人展に出ているのを知り来て下さったのです。本当に不思議なご縁を感じます。今は「突然新しい兄弟が増えたような気がする」とおっしゃられてお付き合いをいただいています。

雅人の一言

☆今年の冬はホントに暖かい、12月だというのにセーターも着ずに散歩ができるなんて不思議だ、地球温暖化のせいなのか？年々暖かくなっていく、ここ5~6年の竹は少し柔らかくなって、身が詰まっていな竹（我々はイモ竹という）が多くなってきた。竹も暑い時や寒い時を経験して育った方がしっかりと身が詰まった竹になるようだ。20年前、竹工芸を習い始めた頃はもっとバリッ、バリッと気持ち良く割れていたものだが。

☆お客様から「竹はいつ頃切ったらいいのですか？」と聞かれる。私たちは先人から「木六、竹八」とか「木元、竹裏」などと教えられた、これは昔から伝わる諺で、木は六月に竹は八月に切るのが良い、木は下から竹は上から割りなさいということだ、陰暦の八月なので今で言うと十月頃に切るのが良いようだ。春になると竹の子が出る。竹は四ヶ月で十メートル以上にも成長する。一日で80センチも伸びることもあるそうだ。親竹は地下茎を通じて一生懸命子供の竹に養分を送り、八月くらいまでに育て上げてしまう。この頃の親竹は一年で一番養分のない枯れた竹になるようだ。虫から見ると一番美味しくないのであるだろう。年が明けると、もう次の竹の子を作るために養分をどんどん蓄え始める。そんな事から、十月くらいに切るのが一番竹が虫が付きにくい時期だと言われている。

☆私たちは直接竹を切り出すことはしない。大分県は日本一の竹の生産地という事で竹藪から竹を切り出す「切り子さん」青い竹を油抜きして干しあげる「竹屋さん」と専門の職種の方がおり、白く艶の出た竹を割るところからが私たちの仕事である。今この切り子さんが高齢化してきて、竹を切り出す人が居なくなりつつある、藪の中で竹を切り、枝を払い、重たい竹を道まで運び出す様な地味な仕事をしようという若者はいない。いろんな職業の人たちが繋がって作品が出来ていくのだが竹籠一つを取っても難しい時代になってきたものである。



大分県宇佐郡安心院町萱籠1167
Tel & Fax 0978-48-2027
Email takae@cronos.ocn.ne.jp

竹工房 オンセ
高江 雅人